■　月への旅行　■

１人の妄想家がいる。名前はイーロン・マスク、４７歳。南アフリカ出身で、活躍の場を求めてアメリカに渡る。大学時代にこう考えた。「人類にとって今後大切なテーマは、インターネット、持続可能なエネルギー、宇宙の３つだ」。オンライン決済、電気自動車を手がけ、現在は宇宙に挑んでいる。

彼のどこが妄想家か。それはその目標にある。「人類存続のためには、宇宙進出が不可欠」で、そのための「１００万人の火星移住計画」を掲げる。

彼が起業した宇宙開発ベンチャー、スペースＸは国際宇宙ステーションへの物資輸送などで実績を重ねる。打ち上げ費用削減のため、ロケットの再利用を打ち出し、３年前には、世界で初めて、衛星打ち上げロケットの垂直着陸を成功させた。

火星移住の実現にはロケットの大型化などの技術革新が不可欠で、まずは月への宇宙旅行を商業化することで技術を蓄積したい。そのスペースＸは９月１３日、月を周回する宇宙旅行で民間の旅客と最初の契約を結んだと発表した。それが日本人と聞いて驚いた。

契約したのは、ファッション通販サイト「ZOZOTOWN」を運営する前澤友作。月旅行は 2023 年の予定で、６～８人のアーティストを連れて行きたいという。アーティストに限定することなく同行者を公募するなら、私もぜひ応募したい。

まだ多くの人は、火星移住など妄想に過ぎないと考えているだろう。でも、夢や希望に共感できれば、妄想家に資金や技術を提供する人がいるのも事実だ。契約料は明らかにされていないが、前澤は「小さい時から月が好きだった。このチャンスを逃せないと思った」と語っている。

かつては、「遠い世界の話」と思えた宇宙が手の届くところに来ている。私にはそれほど時間がないが、生徒たちが宇宙旅行に行く可能性は格段に高い。値段も安くなるだろう。なんともうらやましい。

もし、私が契約者だったらと考えてみる。出発までの５年間はワクワクしっぱなしになるだろう。実際に宇宙旅行を経験すると、その後の人生観も大きく変わるに違いない。「誰もが宇宙に行ける」ことには、それほど人々を突き動かす魅力がある。

世の中を変えるようなイマジネーションは若い頃に創られる。もしかすると、これからの日本にもイーロン・マスクのような妄想家が現れるかもしれない。そして、私たちの学校にも。